

特集—海と島の日本・X

・【Interview】島を根底にした国家観の再生を
松本健一……………23

・この国のかたちを衛^{まも}るのは島である
平野秀樹……………54

・〈奥〉つシマの〈間〉の〈オクレ〉の構造
菅田正昭……………64

【Interview】

島を根底にした国家観の再生を

麗澤大学教授 松本 健一

グローバルイズムが進み、準戦時国家や海洋進出を目論む国々のナショナルリズムが台頭、混迷を深める東アジアという地域にあつて、いま日本の島々は世界地図・世界史の奈辺に位置しているのか。また、海洋島嶼国という国家自像やナショナルアイデンティティの再構築、海洋を介した共存共栄のために、「中央」に対する「周縁」「辺境」と見なされてきた島存在の重要性を根底に据えた国家のとるべき行動と住民自治のあり方とは何か——。最近、『海岸線の歴史』を著した、わが国を代表する思想家の松本健一氏に余すところなく語っていただいた。

—— 日本近代史の縮図だった「隠岐騒動」

—— 隠岐ではじめて知る島固有の歴史や文化

—— 「中央」を相対化し、文化や人をつなぐ海の道

—— 島々の高い自治意識と先進的な精神風土

—— 文化の脈略で構想する「東アジア共同体」

—— イギリス流の海洋国家として生き延びてきた戦後日本

—— 分権的で、各地の文化や産業を大事にしていた江戸時代

パトリオティズムを育ててきた郷土教育
島の特性の再評価と文化の豊かさの再認識を
総合産業、総合文化の場として島を考える

日本近代史の 縮図だった「隠岐騒動」

——松本さんの『孤島コミュニケーション論』（現代評論社、一九七二年）、現在でもわれわれにとってのひとつのバイブルな
んです。

松本 もう四〇年近く前の本ですね。

——その二〇年後には、隠岐騒動（註①）をテーマにした『隠岐島コミュニケーション伝説』（河出書房、一九九四年）も上梓されています。松本さんの世代と続く世代は、大学闘争が東大に始まり、日大闘争、全国全共闘運動と展開していった時代を生きました。そこに島という御縁をいただいで、最初にぶち当たったのがこの本だったんです。

ほとんど同じ時代の空気を吸った人がこういう本を書かれた。これは驚くべきことで、季刊『しま』でも「島の本

一〇〇冊」特集（第二六号、一九八四年）で、島を考える人たちに絶対読んでもらいたい本として紹介しました。この本には、島の自治論をはじめ、現在に通じるテーマのほとんどすべてが網羅されています。

ところで松本さんにとって、なぜ「孤島」「隠岐」だったんですか。

松本 私と同世代で、隠岐の島町役場に勤めていた小室さんという人がいるんです。今年の三月に定年で辞めたんですけど、この人が「隠岐学セミナー」（註②）の担当者なんです。二十代の彼が大阪の書店に立ち寄った時、外函に島の地図が描いてある本（『孤島コミュニケーション論』）が目にとまりました。その地図を見た瞬間、「隠岐島だ」と思ったと言います。パトリオティズム（郷土愛）が強いから、すぐにわかったんです。そのことをきっかけに、彼は私の読者になってくれた。彼としても、隠岐島や隠岐の文化の位

置づけをはっきりさせたいという思いがあったのです。

島に惹きつけられたのは、隠岐島に親戚があるとか、そういうことではまったくくないんです。私が一八歳のとき、文芸評論家・保田與重郎（一九一〇～八二）の著作を読み、古典に描かれた日本の美を見出していくことが、日本人の生き方の美しさを発見することなんだという、日本浪漫派的な美学ですね、この考え方が私にとってはショックだったんです。悪くするとそれは、美しいもののためには滅んでいってもいいという滅びの美学、殉教の美学、夭折の美学になってしまふ。

——いわゆる、華麗なる終焉論ですね。

松本 こうした自らの精神を確認し、押しとどめ、自己批判し超えていこうと考え、保田與重郎の同級生で魯迅の翻訳者、中国思想の研究者だった竹内好（一九一〇～七七）の著作を読み始めた。私が大学に入ったのは六〇年安保の四年後。竹内好は六〇年安保闘争の指導的立場にあった人で、それだけ影響力が強かったということもあります。

竹内さんは大学を辞め、『中国』という雑誌を刊行するわけですが、一九七〇年に私が「北一輝論」で論壇にデビ

ューしたとき、論文を載せた雑誌の一つに『辺境』があった。『辺境』には竹内さんも書かれていて、「辺境、よきかな」と。自分の雑誌は『中国』だけれども、世界の中央、中央論壇を相対化し、批判的に眺めるという意味で、「辺境」という名前を使いたかった、と。それぐらい、自分にとっては思い入れのある誌名だと書かれていました。

竹内好の評論集に、E・H・ノーマン（一九〇九～五七）——安藤昌益を再評価したカナダ人の日本史家——の著書

彼としても、隠岐島や 隠岐の文化の位置づけを はっきりさせたいという思いが あったのです。

『日本における兵士と農民』（白日書院、一九四七年）についての書評があったんです。その本のなかでノーマンが「隠岐騒動についての民衆側の史料がない」と指摘した一行だけで、日本のアカデミズム全体を批判しているのだ、と竹内さんは評論している。ノーマンは、隠岐騒動は日本の近代史それ自体の縮図ともいえるぐらいの大きな事件なのに、日本の学者は研究もしないし、視野にも入っていない、そこに日本の大きな学問的欠陥があるんじゃないか、隠岐騒動という歴史についての文献、それ自体を残すという発想がそもそもないのではないかと、日本の権力と学問の批判をしているわけです。

隠岐騒動が
日本の近代史それ自体を
象徴するような事件であるならば、
私は日本の歴史を
知らないことになる。

明治以来の官僚制度のもとにおかれた日本の権力機構は、お上の立場から史料を残したり、自分たちの正当性を主張するために歴史を書いたりするけれども、実際の隠岐騒動に巻き込まれ、戦った人々の書いたものや文献、歴史観などを取り上げない、そういう拭きたい傾向があるのではないかと、と。だから史料も残っていないし、学者は史料がないから扱わず、研究しない。

当時の私は、隠岐騒動という出来事すら知らない。それが日本の近代史それ自体を象徴するような事件であるならば、私は日本の歴史を知らないことになる。そこで自分で調べてみようと思ひ、後で調べたら、たまたま東大の経済学部『隠岐島誌』（隠岐支庁編、一九三三年）が置いてあったんです。

それを読むと、ちゃんと隠岐騒動の顛末が書いてあった。隠岐の民衆側が出した檄文や文武館（尊王攘夷派の修練学問所）



1801年に建てられた「億岐家住宅」。屋内の柱には「隠岐騒動」時の刀傷が残る。

設置の嘆願はすべて取り上げられず、徳川幕府・松江藩から弾圧された。最後には明治政府・松江藩から大砲を撃たれて死者一人を出したというところまで、すべて書かれている。この隠岐騒動を、私は「隠岐コミュニティ」と言い換えることしたんですけど、島の自治、自らの文化を守り、そのために学校をつくるという運動だったわけですから、そのために記録役をやった人がいた。井上整介さんという人で、その息子さん『隠岐島誌』の編纂人の一人なんです。当時、高校の先生なんですけれど、ちゃんと人間の脈絡、精神的な脈絡も通じているじゃないかと。

ノーマンは、文献もないと言っていた。そこには日本の学問に対する批判も出てくる。それだったら、まず、自分で行ってその土地を見、関係した方の子孫の方々から話を聞き、伝説や伝承を掘り起こすしかないんじゃないかと考えたのです。当時まだ一九歳、ある種の足の軽さがありました。島という土地に渡ったのは、それが初めてです。一九六五年二月のことでした。

※註1 隠岐騒動…一九六七（慶応三二）年から六八（明治元）年にかけて、松江藩の支配下にあった隠岐国で起こった政治革命。黒船の出没に危機感を募らせていた隠岐住民は、自らの島を自らが守るべく、孝明天皇の侍講をするなど京都で活躍していた隠岐出身の儒者・中沼了三を頼り、尊王攘夷の拠点として中沼が創設した大和国十津川郷の「文武館」を隠岐にも開設するための建白書を松江藩に提出しようとした。住民の武装・教育をおそれた松江藩の隠岐郡代は三度にわたってそれを拒絶、ついに隠岐住民三〇〇〇人が郡

代陣屋を急襲、郡代を島外に追放し、立法院・行政府・国軍を組織する自治政府を樹立した。しかし、八一日後、松江藩の出兵により自治政府は鎮圧され、隠岐側に死者一四名を出した。

※註2 隠岐学セミナー…「かつて文武館をつくるために若者たちが革命を起こした隠岐に、大学の一つもないのはおかしい」と、学生時代から隠岐騒動の研究を続けていた松本健一氏、谷川健一氏が声を上げ、隠岐住民も島外者も自由に参加できる郷土大学として、地元住民有志が中心となつて一九九四年秋に開講。以後、著名な文化人や学者、作家などが松本氏とともに来島、二〇〇九年で一五回を数え、隠岐の文化・歴史の再評価などをテーマにした講座が続けられている。

隠岐ではじめて知る 島固有の歴史や文化

——私たちは、松本さんにとつての「海」観にたいへん興味を持っています。

松本 私は生まれも育ちも群馬県ですから、周りに海がない。ただ、海が近い感覚はあった。夏には、海水浴は両毛線で佐野や栃木、水戸を通って大洗の海岸に行っていましたし、私の町の出身で、「勤皇の泣き男」と呼ばれた高山彦九郎（一七四七～九三）は、「寛政の三奇人」の一人なんですけれど、彼は水戸まで行き、藤田幽谷（一七七四～一八二六）——水戸学者の藤田東湖（一八〇六～五五）のお父さんで、後期水戸学の開祖ですが、そんな人とも親交をもち、日本じゅうを歩いて回っている。

水戸は海の近くですし、後期水戸学の勃興は、イギリスの捕鯨船の乗組員が水戸藩の大津浜に上陸したことに対する危機感ですね。いまは

友好的だけれど、いざ侵略軍になって襲ってきたら、日本はどうなってしまうのかという危機感が、水戸学者の会沢正志斎

(一七八二〜一八六三)の『新論』(一八二五年)という

尊王攘夷を主張する論文になっているわけですよ。

列島の周りにイギリスやロシアの船が来るようになっていて、日本をいかに守ったらいいかと。この『新論』は、

のちに長州藩士の吉田松陰(一八三〇〜五九)や松代藩士の佐久間象山

(一八一〜六四)などに大きな影響を与え、近代日本のナショナリズムを喚起させるきっかけをつくった本

です。私自身、そういう思想史のレベルで海というものを考え、身近に思うようなメンタリティーもあった。

ただ、実際に海を渡って島に行った経験では、隠岐島が初めてでした。

そこには人間の歴史があり、地域の固有文化があり、それを支えていた人々のメンタリティーがある。本土とは大

きく違う、一つの精神空間、独自の歴史があり、固有の文化があると北一輝

の佐渡島を訪れて実感しました。日本文化というものと重なり合うところもあるけれど、微妙に違うところもある。

たとえば『海岸線の歴史』(ミシマ社、二〇〇九年)にも書いた隠岐の古典相撲(註3)、私たちは見たこともなかつ

たわけで、そういうものも隠岐の町中を歩いて人に聞いてみると、いろんなことがわかってくる。「ここは一つの国なんだな」と実感しましたね。

私は若いとき、島に手紙を出すときには隠岐国、佐渡国、淡路国などとわざわざ書いてました。最

近、平成の大合併で、隠岐の島町と佐渡市になって、島の名前

と国の名前、自治体名が同じになったという点で象徴的だったし、いまは郵便番号がありますから、県名なしの隠岐の

私は若いとき、

島に手紙を出すときには

隠岐国、佐渡国、淡路国などと

わざわざ書いてました。

後期水戸学の勃興は、

イギリスの捕鯨船の乗組員が

水戸藩の大津浜に

上陸したことに対する危機感ですね。

島町、佐渡市だけで行っっちゃうわけですよ。

隠岐島も佐渡島も、明治になると島根県隠岐郡、新潟県佐渡郡などとなった。島からすれば明らかに県の下位に置かれることになります。ところが江戸時代までは一つの国だったわけで、その独自空間が、現地へ行ってみると、わあっとわき上がってくるわけです。そういう体験、島の持っている歴史や固有の文化、そこの人々の生き方というものを直接的に知るようになったのは、まさに隠岐島に行くようになったのがきっかけです。

※註3 隠岐の古典相撲…特別な慶事があつた際、中学生から成人まで隠岐全島を挙げて催される伝統の草相撲。役力士の勝者には土俵の四隅に建てられた柱が与えられることから、「柱相撲」ともいわれる。慶事のあつた地区(座)とそれ以外の地区(寄方)との対抗戦で、数百番の取り組みが徹夜で催される。特徴は、同じ取り組みを二番続けて行ない、最初の一番は真剣勝負、次の一番は先勝者が負けて必ず一勝一敗で取める共同の精神にある。戦後の一時期、相撲そのものが存亡の危機に瀕したが、一九七二(昭和四七)年に住民の熱意によって復活した。

「中央」を相対化し、 文化や人をつなぐ海の道

松本 最初に隠岐に行ったのは二月でした。隠岐騒動が起きたのが二月だったものだから。松江の宍道湖大橋のところから船が出ており、当時は六時間半もかかった。島で

は、西郷の町で一日じゅう海鳴りがしている。岸壁に波が打ち当たって音がしている。そういう感覚は経験したことがなかったものだからびっくりしました。そのとき、何か買物をしたんです。少額の買物をして一〇〇〇円札を出したんです。そうしたら、おつりを五〇円札で十数枚渡されたのですよ。五〇円札がたくさん残っているのは、遅れているということではなくて、ここには違う金銭感覚、違う時間感覚が残っているんだということが、実感として伝わってくるという、そういう珍しい経験もありました。

——なるほど、そういう一瞬つてありますね。島の奥深さ、あるいは底力みたいなもの。さつきおつしやつたように、同県内においても、ややバイアスがかかってしまう。これはすべての地域——あの新天地と言われた北海道だろうが、尚王朝の琉球だろうが、やはりかなり違うと言われる。言葉としての「辺境」「中央」の発生ですね。

松本 この国にはそういうヒエラルキーがあつて、たとえばいばん南の外れの薩摩は、中央から差別されたり、いろんなどころでマイナスを引き受けなくてはならない。ところが、薩摩からすれば奄美や琉球というのはさらに離島であつて、文化的な偏差があるというバイアスがかかった見方をする。私の友だちが沖繩にいたので一九七五年に入ってみると、群馬の太田以上にアメリカ軍の基地がたくさんあるばかりでなく、首里が中央の役割を果たしており、

宮古島や石垣島などは「先島」と呼ばれて差別されている。「中央」を頂点とする差別の序列があったということだと思います。

それで私のことを、「汝は西城秀樹か」とかって言うわけですよ（笑）。平安朝が中心にあって京都の文化が流れてくる。佐渡島の食事の味つけも、江戸

風ではなく、京風なんです。言葉も京風だし、民謡「佐渡おけさ」の歌詞

私は北一輝（註4）のことを研究しはじめて一九六九年から佐渡島に行くようになったんですが、行ってみると、佐渡島の人々は、新潟や中央に対してものすごく相対化をするという意識——われわれは、中央政府から離島として扱われ、金銀を掘るために罪人を送られたけれど、もともと佐渡の文化は能登半島を経由して、京都からつながっている、そういう意識がすごく強いんですよ。

「中央」を頂点とする差別の序列があったということだと思います。

「佐渡は四十九里、波の上」、あれも新潟からじゃなくて、能登半島からなんです。

それは子どもの話し言葉にもあらわれていて、私が佐渡島の海辺を歩いていたときのこと、子どもが寄ってきて「汝は」って言うんですよ。私がGパンなんかをはいているものだから声をかけてきた。そういう都会風の風俗をした男の子が海辺を歩いている姿は見たこともなかったわけです。

一九七五年ごろから数年間、能登半島の珠洲から佐渡島の小木まで、フェリーが運航されたことがありました。それは昔の京都文化が伝わってきたルートなわけですね。その航路ができたとき、私はわざわざ小木から珠洲まで乗ってみました。

海というのは、陸と島、本土と離島を隔てるように見えるけれど、船を使うと、どこでも簡単にに行けてしまう。

——私も乗ったことがないのに（笑）。松本先生は乗っていらっしやっただんですか。

松本 ええ。朝、佐渡島の一番北の外海府の集落を出て、小木まで三つか

四つバスを乗り継いで、

それから声をかけてきた。そういう都会風の風俗をした男の子が海辺を歩いている姿は見たこともなかったわけです。

フェリーに乗って、その日の夜に金沢に着くという経験をしました。かなり長いルートなので、やはり佐渡は辺境だ、



樹齡2000年の御神木が残る隠岐・玉若酢神社。「隠岐騒動」が鎮圧された後、島では廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた。

離島だと思われるかもしれませんが、逆に言うと、京都と佐渡をつなぐルートにそのまま乗ったということなんです。文化はこのルートを逆に伝わってきたんだということ、よくわかる。世阿弥は京都から流されてきた。人間も文化も、海の上のルートをたどってきた。海というのは、陸と島、本土と離島を隔てるように見えるけれど、船を使えば、どこでも簡単に行けてしまう。

これは隠岐島も同じで、隠岐島の人々が松江藩と交渉を持たず、明治の維新政府に直接嘆願をするときには、北前

船の航路とほとんど同じルートで隠岐から船に乗って、若狭に着くわけです。若狭からは昔の鯖街道を通って京都にそのまま入っていける。風向き、潮向きの問題はあるんですが、意外に海というものは、人と人、そして陸と島をつないでいる、そういうルートになっているということです。

※註4 北一輝（一八八三—一九三七）…佐渡島生まれの思想家、革命家。自由民権を志向する佐渡の精神風土のなかで独自の社会主義思想を形づくり、国家社会主義の革命バイブル『日本改造法案大綱』で軍事クーデターによる国家改造を主張、二・二六事件の理論支柱と目され、刑死した。

島々の高い自治意識と 先進的な精神風土

——佐渡島のとらえ方というのは、本土から見ればバイアスがかかり、身分制の話もある。しかし、こうしたものを軽く超えてしまうエートス（ある社会集団が共有する道徳的な慣習・行動の規範）があつて……。

松本 そう、共同のエートスがあつて、その根底には島独特の時間軸や空間軸があるわけです。それは、教科書で習っている内容とまったく違う。

——島の仕事をはじめた当初、トカラ列島へ出かけたんです。一日の給電時間が四時間、練りワサビが入ってきたばかりで、メインディッシュがマルハの魚肉ソーセージの

ライスだった時代ですよ、沁み入るような昔物語を突然はじめてりする独居老人がいた。子どもたちは大阪や鹿児島、東京におり、状差しにある現金封筒も茶色くなってすけているんだけれども、頑強に、この島が正しいと言ひ張る。圧倒的に好きだと、あの時代の人たちはおっしゃる。

一方で、五島藩の古文書のなかからじつに妙な地図を発見した人がいて、よくよく見たら、小笠原諸島の古地図だった。島というのは中央サイドからバイアスをかけられて見られますけれど、歴史的に非常にグローバルな視点を持っている。

松本 たえば群馬県からすると、文化が

伝わってくるのも、情報が出てくるのも、政治で決められたことが伝わってくるのも、すべて中央、江戸⇨東京からなんです。ところが島は、周りが海に閉ざされているという考え方もあるんだけど、佐渡島の場合、一方では北海道にもロシアのウラジオストクにも直接行くことができる。能登半島を経て京都との文化的な交流もある。東京対佐渡島ではなくて、あらゆるところに文化や経済の触手が広がっており、文化的なコミュニケーション、その人的脈絡がある。

一九九〇年ごろ対馬に行ったときに、海のすぐそばで、

見たこともないような海藻がバケツに入っているわけです。「これ何ですか」って聞いたたら、おばさんが「白モズクです」って言うんです。私たちは、モズクは黒いものと思っ

共同のエートスがあつて、その根底には

島独特の時間軸や空間軸があるわけです。

ているわけですね。市場に出ているのはそれだけです。ところが対馬の人は、白モズクのほうがおいしいと、真つ白なものを食べる。

それでいろいろ話を聞いていたら、そのおばさんが、「これあげますよ」と言う。ただでもらうのは悪いので「代金を」と言ったら、「私の息子が東京に

出ておりまして、東京の皆さんにはお世話になってます。あなたは東京から来たんだから、これくらい差し上げてお世話するのは当然です」って言うんです。そこには東京に対するコンプレックスや、どっちが序列が上だという感覚もない。そういうメンタリティーを逆に言えば、いざとなったら自分たちの島は自分たちで守らなくちゃならないとなる。

一八六一年にロシアの軍艦が対馬の一部を不法占拠したことがありました。

——ポサドニック号事件（註5）ですね。



思想家。麗澤大学教授（比較文化文明研究センター長）。昭和21年群馬県生まれ。東京大学経済学部卒業。法政大学大学院在籍中に『若き北一輝』（現代評論社）で論壇に登場。主著に『孤島コンミュン論』（現代評論社）、『隠岐島コンミュン伝説』（増補新版、辺境社）、『評伝北一輝』（全5巻、岩波書店）、『泥の文明』（新潮選書）、『海岸線の歴史』（ミシマ社）など多数。『評伝北一輝』全5巻（岩波書店、平成16年）で第59回毎日出版文化賞、第8回司馬遼太郎賞を受賞している。平成12年の衆議院憲法調査会では「国民憲法と第三の開国」をテーマに意見陳述を行った。

松本 このときに島の人々が、薪を投げたりしてロシア兵に抵抗するわけです。このために村の地役人などがピストルで撃ち殺されちゃうんですね。島の人々が怒って、抵

のが、一九七〇年あたりの発想で、『孤島コンミュン論』になったんですけれど、その史実には、小笠原島凶徒嘯聚事件（註6）などの独自の展開もあったわけで

抗運動をした。相手の武力がものすごく強いから、結局、追い出せはしないんですけれど。しかし、島びとは精一杯抵抗して、自分の島は自分たちで守ろうという気概でロシアの海兵と戦った。ある意味では、隠岐コンミュンと同じような気概、メンタリティーですよ。

——幕末当時、あれだけきびしい幕藩体制の現実の中で、隠岐コンミュンのようなきつちりした組織化を図っていく。それに、文武館の設立という、運動の根源がものすごく純粹ですね。純粹なゆえに……。

松本 自分たちの島がどこにあるのか、世界はどうなっているのかを見極め、島を守るためにはどういう教養や訓練、学習場や武芸場が必要なのかを考え、すべて自分たちで組織していくわけですからね。隠岐騒動は、そういう自治の動きがつぶされることで発生した事件ですから、他の島でも同じような歴史があるんじゃないかと考えた

す。

いま、日本全体の人口は、幕末から明治のころに比べておよそ五倍になっているのですが、佐渡島でも隠岐島でも、明治のほうがいいまより人口は多いんです。隠岐騒動のとき、

隠岐全島で一万二〇〇〇人いるわけですよ。そのうち男が六〇〇〇人とすれば、成人男子は三〇〇〇人。コミュニティで自治政府をつくるために参加したのが三〇〇〇人なんです。

すよ。ということは全島を挙げて参加していることになり、ますよね。

淡路島でも、明治の初めのころ、淡路自由党を結成したときの黨員メンバーが二七四人いるんですね。これはすごい割合ですよ。この自由民権運動のなから、たとえば立川雲平（一八五七―一九三六）という人が出てくる。彼は島崎藤村の『破戒』に登場する猪子蓮太郎という、民権派人権派の闘士、弁護士モデルなんです。まだまだ因習にとらわれているような、差別意識のある長野県の中で、被差別部落運動に取り組む、あるいはその人々の人権を守ろうとする弁護士が淡路島出身だった。だから、島は後れていたなんていうことはまったくありません。

島びとは精一杯抵抗して、 自分の島は自分たちで守ろう という気概でロシアの海兵と戦った。

いま、佐渡島に独自の新聞はありません。戦前、一県一紙制で統制したときに、新潟日報だけになった。戦後、佐渡民友新聞がつくられたことはあるし、いまはタウン紙みたいなものもあるんですけど、

れど、一〇万人の島で、佐渡新聞、佐渡毎日新聞、佐渡日報、新佐渡、もっとも多いときは四紙の日刊新聞があったのです。その文化的な水準の高さ、当時の人々の自治意識の強さという気がするんです。

うはすごかったんだろうという気がするんです。そういう精神的な風土があって初めて、北一輝などにうに突出した、政治思想の天才が生まれてくる。ただ天才は、害を及ぼすこともある。「何でおまえらはわからないのか」と、ほかの連中をばかにしたり、粛清したりするということもあり得るわけです。だけど、そういう傑出した才能は、島独自の精神的な土壌があって初めて、生まれてくるんだと思います。

※註5 ポサドニツク号事件…幕末の一八六一（文久元年）年、極東での根拠地獲得と南方進出を目的としたロシアの軍艦ポサドニツクが来航して対馬の一角を占領、兵舎や工場などを建て、半年余にわたって占領した事件。対馬藩主の宗義和はすぐさま退島を求めたが、ロシア側は土地の租借を強硬に要

求、対馬藩の警備地役人を射殺し、郷土や村民を捕虜として拉致、武器や物資を略奪するなどした。同じく対馬租借を企てていたイギリスが勝海舟の要請によって介入し、軍艦による示威行動を行うなどしたため、ようやくボサドニックは対馬から退去した。

※註6 小笠原島凶徒嘯聚事件…一八七六（明治九）年に日本領有が確定し、官選に近い議員たちが島政を支配していた東京府小笠原島では、非常予備米と金銭（島費）を住民の抛出で蓄えておく規則があった。しかし、その管理運用に関して不明朗なところがあつたため、一八九〇年四月、数十名の住民有志が、議員たちの解職と住民の要望に反する規則の全廃を東京府小笠原出張所などに訴え、およそ二ヶ月間にわたつて島費の徴集と諸規則の適用が停止された。後日、住民側の主だった八名が東京府知事によって凶徒嘯聚罪で告発され、懲役刑などを宣告されたが、再審で全員無罪となつた。

文化の脈略で構想する 「東アジア共同体」

——敗戦後、昭和二〇年の一〇月、国が緊急開拓令を出し、瀬戸内海でも開拓がかなり進んで、無人島が有人化したところもあります。沖繩も含めて、東京よりもはるかに永い歴史を持つ多くの島々が、いわゆる「離島」「離れ島」と呼ばれています。その中で隠岐騒動が発生し、北一輝を生んだ精神的土壌が佐渡にあつた。

人々が各地でコミュニケーションをつくって、
同時並行的に自立すれば、
中央なんていうのは意味がないんだ。

「中央」と「周縁」「辺境」についていいますと、若いころ、島の仕事で地方都市へ立ち寄ると、「文化果つる島に、何でわざわざ行くんだ」と問われる。ある島から戻ってくれば、タクシーの運転手から、「島帰りか。おまえ、あばら骨が一本足りないだろう」と言われる。これくらい徹底してバイアスを掛けてくるわけですね。これは、水平社運動をもっとも激烈にやっていたところですから、わからなくはないですが、しかし、島なりを隔絶をしていく側の、こうした論理というのは、いったいどこから出てくるのか。

松本さんは、この問題を乗り越えるためには、島にあつて国を立ち上げる、しかも同時性が必要だろう、と。正直言つて、これはものすごくわくわくしました。

松本 たとえば本土と離島、あるいは中央と地方、中心と周縁でもいいですけど、そういう関係性やヒエラルキー

は、われわれの世代には、知識人の東大教授が文化（民族の生きかた）を指導する、知識を独占するというのが、無名の青年たちが、何を言っているんだ、専門ばかじゃないかと言つた、その構図と同じなんです。

す。だから一九七〇年にそれが出てくるというのは当然で、

北一輝を研究していても、「おまえは学者じゃないじゃないか」と、私などはまだ言われるわけです。所属場所がアカデミアにないと学者じゃない、と。

これは『白旗伝説』（講談社学術文庫、一九九八年）を書いた時点でも同じなんです。ペリーが持ってきた日本降参用の白旗が日本の中に広まって、白旗を挙げたら敗北を認める、降参するから攻撃しないでくれというメッセージになったんだと書いたとき、東大史料編纂所の教授が、そんなのはうそだと言ったわけですよ。ところが、その史料は東大史料編纂所が明治四三年に編纂したものの中に入っています。史料を独占して、

歴史を書ける者は東大教授である、権威としてあぐらをかいているというのはおかしいというのが、まさに四〇年前のわれわれ世代の感覚だった。

これは言ってみれば、中央政府に対して『孤島コンミュニオン論』を示して、孤島にもそれぞれこういう歴史や文化があって、人々の必死の思いがあったんだ、と。孤島で生きている人々が各地でコミューンをつくって、同時並行的に自立すれば、中央なんていうのは意味がないんだという考え方になってくる。

日本の地層や根底には、 インドや中国本土、朝鮮半島などから 脈絡として流れ出てくるものもある。

政治思想史の橋川文三（一九三二〜八三）さんが、『ナシヨナリズム』（紀伊國屋書店、一九六八年）という本の中で、隠岐島コミュニティについて非常に関心を持っており、全国史もずいぶん違っていただろうと書かれていた。それは一種のロマンチズムだろうと思えますけれどね。しかし、そういう思考の上に、政府とはどのようなあり方がいいのか、明治の国民国家にはどういう欠陥があったのかということに、初めて歴史が普遍化できるという気がするんです。——橋川文三さんは対馬生まれですが、橋川家のルーツは違いますよね。

松本 広島です。お父さんもお母さんも広島なんです。広島の人、対馬に漁業で、出稼ぎのような形で、定住はするんだけど、本家は広島にある。だから生まれは広島なんだけれど、広島にあとは対馬に行っちゃうわけです。そういう意味で、これで広島という、本土の大きな都市、あるいは江戸時代の藩と、対馬とが直接結びついていることがわかるわけです。

先日、朝鮮半島の浦項ポクに行ってきたんです。今はポスコ

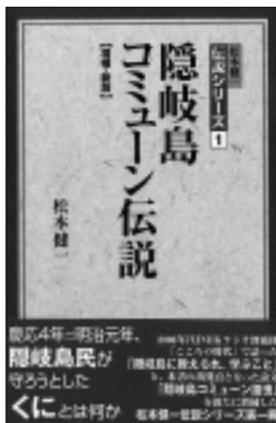


『孤島コンミュニオン論』

「孤島は、大海にぽつんと浮かんでいるがゆえに孤島なのではない。大陸もしくは本土から隔絶されているがゆえに孤島なのである」——明治維新後、隠岐や佐渡、杓岐、小笠原で起こった住民の抵抗や政治革命は、権力集中を図る中央政府に抑圧され、かつて一つの〈国〉だった島々は本土から隔絶されて〈辺境〉へとおしやられる。自治の意味や共同体の精神（エートス）の重要性を現代に問う。

【目次】 孤島の位置／佐渡コンミュニオン序説／佐渡コンミュニオン残照／田岡嶺雲と森知幾／北一輝の出自／小笠原島コンミュニオン論／杓岐島コンミュニオン／隠岐島コンミュニオン揺曳／わが孤島／孤島空間への途／遙かなる海彼の幻想／孤島コンミュニオン論

●昭和47年11月、現代評論社、現在は入手不可



『隠岐島コンミュニオン伝説』

日本の近代史そのものの縮図といわれる「隠岐騒動」。黒船に対する危機意識から自治政府を樹立するに至った島の政治革命を「騒動」と名付けた日本の支配層や、研究対象としてこなかったアカデミズム。当時19歳の著者は大きな不満を胸にひとり隠岐に渡り、暗鬱に閉ざされるしかなかった島びとの精神を見出す。コンミュニオンの意味を再評価し、明るさへと転化していこうとする地道な運動も続く。

【目次】 隠岐島コンミュニオン揺曳／隠岐島コンミュニオン伝説／隠岐島コンミュニオン残影／「隠岐学セミナーのこと」／「隠岐島に教えられ、学ぶこと」

●増補・新版：平成19年1月、辺境社、定価2,200円＋税



『海岸線の歴史』

日本はその国土面積に比して海岸線の異常に長い世界有数の国。しかし、高度成長期以後、日本人は海岸線から遠ざかり、いまやその空間は経済実利や軍事面でのみ意味を持つ場所となった。「海彼に故郷を思い海辺に生きてきた」日本人と海とのかかわりを、民族アイデンティティの一つの原点、共同の記憶として甦らせ、文明史の視点で問い直そうと試みた出色の書。

【目次】 海岸線は変わる／陸と海、神と人間が接する渚／山中に海があった／海岸線に変化はなかったが／白砂青松の登場／『海国兵談』とナショナルな危機意識／「開国」と海岸線の大きいなる変化／砂浜が消失する時代／海へのアイデンティティ／海岸線を取り戻す

●平成21年5月、ミシマ社、定価1,800円＋税

という大製鉄会社があって、でき
てからまだ四〇年しかたっていない
んですけれど、新日鐵よりも大
きな会社になっちゃったんですね。
その近くに、かつて日本人村があ
った。漁業をやっている、当時の
家並みがまだ残っている。そこを
見に行っただす。

八〇軒ぐらいの日本人村なん
ですよ。人口は二〇〇人ほど。その
家がすべて残っていて、歯医者、
風呂屋、自転車屋、魚屋など、漁
業関係のものもたくさんあり、す
べてに電話番号が入っているん
ですよ。昭和二〇年にみんな引き揚
げて帰ってきたわけですが、当時、
すべての家に電話が引かれていた。

——当時の日本の津々浦々の状況に比べたら、すごいこと
ですね。

松本 この村の前身は、香川県の漁村なんです。瀬戸内
海で魚が獲れなくなったので、明治の末から朝鮮半島に
来て、最初は二、三人だったらしいんだけど、魚がものす
ごく獲れる。これを日本に輸出すれば大もうけできるとい



佐渡・両津にある北一輝の墓所。

うので、結局、分村運動みたいなことになったんです。香
川県と朝鮮半島の東海岸で、こんな文化的な脈絡がある、
歴史的に重層するところがある。逆に愛媛県の屋根付橋や、
徳島県のテグスは中国（南宋）から来ている。そんなこと
を知ると、たとえば「東アジア共同体」のようなものを考
えた場合に、日本とシンガポール、日本と韓国など、政府

間で考える共同体というのは、政治や経済のレベルだけ。自由貿易協定で関税なしで輸出できますよという形での取り決めであって、極端に言えば中央政府や中央にある企業が儲けるような発想ですね。

ところが、香川県の村と、この浦項の村は歴史的な脈絡がある、徳島と中国の江南地方が重なるとなると、日本の文化は世界的にもユニークである、天皇制は独自の制度であるというようなことを言っているよりも、

日本の基層や根底には、インドや中国本土、朝鮮半島などから脈絡として流れ出てくるものもある、と言ったほうがいい。東アジアの一国として、東アジア共同体をつくると言ったほうが、政治権力的な発想ではない、これからのアジアの文明的あり方を考えていく思考を提供してくれるだろうと思います。

イギリス流の

海洋国家として生き延びてきた戦後日本

——そこが本当にお聞きしたいところです。日本が島国だということ、いまでも小学校二、三年生になったら必ず習います。陸上面積が世界で六一番目、ところが海洋面積

(二〇〇カイリ排他的経済水域)ではどうか……。

松本 海洋面積は世界で六番目。そして海岸線の長さ。これは私の『海岸線の歴史』に詳しく書きましたが、日本の

アメリカや中国といった 大陸国家の発想ではない 世界の見方ができるはずです。

海岸線は複雑でぐちゃぐちゃと曲がっていて、しかも島が七〇〇ちかくもある。その海岸線をすべて延ばすと三万五〇〇〇キロ、アメリカの海岸線の一・五倍、中国の二倍という長さになる。それぞれの国柄を特徴づけているものを風土だとすると、狭い国土に比べて異常に長い海岸線を持っている日本の特徴は、島と海の間という風土と、その文化にあると捉えないとおかしい。

日本より長い海岸線を持っているのは、ロシア、オーストラリア、インドネシア、国は小さいんだけどデンマーク。グリーンランドを持っていますから。カナダも両側にたくさん島があつて海岸線が長い。

そう考えると、アメリカや中国といった大陸国家の発想ではない世界の見方ができるはず。大陸国家は陸上に大きな領土を持ち、たくさん資源を持っている国々ですね。そういう国々の孤立主義的な「帝国」の発想と、長い海岸線を持ち、広大な海とたくさん島もある「海洋国家」が立てる戦略、要するに国の生き延び方ですね、これはま

つたく違ふと思うんです。

そのことを最初に考え、行動したのがイギリスで、いまの言葉で言うところ大陸国家に対する海洋国家。イギリス本土は、日本よりもっと狭い島ですね。島数もずっと少ない。日本だと四〇〇以上の有人島がありますが、イギリスには数十島ぐらいしかない。

そういう国が、どのように世界の中で生き残っていくのかと考えると、陸はすべていづれかの国が占拠している。一方、海は自由である。「海洋自由」という考え方に立って、大英帝国は一八世紀から世界に船を出して、七つの海を支配するようになった。ものすごい戦略だと思えますね。陸上を支配するのはなく、自由な海という発想ができた。同じ様に、日本も海洋国家として生き延びていくんだという考え方になったんですね。

特に戦後は、イギリスと同じく貿易を盛んにする——私の言葉で言うところウエルゲームということですが、しっかりとした産業を持って貿易を盛んにすれば、国は発展できるといって考え方をとった。

——松本さんのおっしゃる、昭和二〇年の敗戦による「第二の開国」ですね。

松本 そうです。戦後は国土も小さくなって、天然資源も少ないけれども、海外から安いものを買って加工するという発想になった。だから、国内の炭鉱は閉山して、地球の裏側のコロンビアから安い石炭を買ってくるわけです。

日本の国は
いかなる国かと考えると、
海洋国家というだけでは
済まない、島嶼国家という
大きな側面がある。

私がかつて、旭硝子という会社に勤めていたんですが、やることは製鉄所と同じなんです。新日鐵などと同じで、大きな窯の中に鉄鉱石を入れるか、ガラス原料の硝石を入れるかの違いなんです。そこに石炭も一緒に入れるんです。上質な石炭を入れると、鉄鉱石などに含まれる不純物も一緒に燃やしてしまうんです。これは原料炭といって、もの

すごく高い。日本で採れるのは長崎県の高島炭鉱くらいだったんです。長崎市の南一五キロぐらいにある島の炭鉱で、私、閉山するとき（その後）実際に見に行きました。

当時、ガラス会社が買うのは高島炭鉱の原料炭だった。一トン三〇〇〇円もする。ところが、海に向こうから二週間ぐらいかけて船で運んでくるコロンビア炭というのは、トン当たり三〇〇〇円。グローバリゼーションの時代にあっ

ては、安いものを地球の裏側からでも買ってきたほうが勝ちなんですね。だから、日本の炭砒は全部つぶれてしまった。高島炭砒がグローバル時代に生き残っていきこうとしても、海底下に坑道を穿ち、数千メートルもの地底から掘り出しているわけですから、ものすごく高い石炭になってしまった。

高島には、一時は人口一万二〇〇〇人ぐらいいた。隣の端島はしま（軍艦島）も最盛期には八〇〇〇人ぐらいいた。一九六〇年代、採炭夫で三万円近くの月給をとっていて、長崎県でもいちばん給料が高かった。そのときに佐賀の農民は、三〇〇〇円だったというんですね。だからみんな、炭砒で働きたくてしよがなかつた。

ところが端島は一九七四年、高島は一九八六年に、閉山してしまふ。そうしたら島の人口を養っていくことができなわけです、産業がないわけですから。島はどうやって生き延びていけばいいのか。それで東大の先生に相談して、島おこしをしたいんだけど、どのようにしたらいいかと当時の高島町が訊いたら、長崎からもそんなに遠くないから、観光客を呼んできて、島で獲った魚でシーフードレストランとかシーフードスパゲッティを食べさせるようなトピカルな町をつくったらいじやないかと。何千万円の調査費をかけて、こんな計画をつくってもらったわけですよ。この学者は東京から来て、ハリウッドにつくるよ

うな店を出せばいいという考え方なんです。

しかし、一〇〇年にわたって石炭しかとっていない島ですから、海で魚を獲る生活をほとんど知らない、魚の飼育方もわからないわけです。高級魚のヒラメ養殖を手掛けました。これは地元の文化や産業に根差したものではないから、危ないと私は言ったんです。そうしたら、二年目ぐらいに台風が襲って来て、水槽を攪拌するための電気がストップしてしまい、ヒラメが全部死んでしまった。どんなに儲かるように見えても、その島の産業や社会、文化、ノウハウなどがないものをやると、うまくいかないんですね。今は人口五〇〇人ぐらい。

これは島に固有の問題ではありませんが、自分の島は何で生きていくのかということを考えないといけない。日本は戦後六〇何年というもの、イギリス方式のウエルスゲームで、しっかりとした産業を持って貿易を盛んにすれば発展できるという方式でした。

国家戦略とすると、確かにそうなんです。ただ、それは日本の半分しか言い当てていない。日本は、大陸国家に対する海洋国家と言うことができるけれど、海洋自由という形で外に活動できるのは大企業や大輸送会社であって、島に住んでいる人々は、農業のほかに小さなせいぜい一〇人乗りの漁船を仕立てて近海漁業をやったりしている。日本の国はいかなる国かと考えると、海洋国家というだけでは

済まない、海に面した島嶼国家という大きな側面がある。

分権的で、

各地の文化や産業を大事にしていた江戸時代

——ここでは「海洋島嶼国家」と言わせていたのだと思います。

ところで、お隣の韓国は、東シナ海の離於島（イオド）、干潮時にも海面下数メートルにある暗礁ですよね、いち早く占有を宣言し海洋調査施設を構築している。

中国は南シナ海の南沙諸島や西沙諸島を

領有し、尖閣諸島や南西諸島、沖ノ鳥島近海などに、米軍がグアムに撤退した段階から入り出してきた。最近は一列島線、第二列島線という対米防衛線を海上に引き、海洋での覇権を握ろうとまでしていますね。

日本という国は、明治期のいわゆる「第一の開国」の後、日清修好条規締結の折衝を数年間にわたってやっている。そのとき明治政府は、中国内陸部への通商権と引き替えに宮古・八重山諸島を清国に割譲しようとした「前科」はありますが、海洋島嶼国家という認識については、いまよりはるかに海に視線が向いていたはずなんです。大和朝廷はじめ、二、三世紀から玄界灘の宗像沖ノ島で、数百年間にわたって国家祭祀を続けているわけですから。韓国

が日本海を東海と言い換えるという話だって、明らかに国家領域のフロントとして、きちっと海洋にシフトしようという思いがある。

二六〇の 独立国家があつたんです。

どうしてこの日本だけが、二〇〇海里宣言も遅れ、国連海洋法条約の署名から批准まで一〇年以上かかったのか。ようやく一昨年、海洋基本法ができました。つい昨日のことですが、二〇〇海里経済水域の起点になる、沖ノ鳥島と南鳥島が主ですが、島の低潮線を保全する法律がようやく成立しました。まさに「ようやく」なんですよね。海洋島嶼国家の政府なのに、どうしてここまで海と島に対して関心がなくなっているのか。

松本 明治維新、つまり「第一の開国」というのは日本にとって必然的な過程だったと思います。内に閉じこもってはいけなないと、世界史のゲームに巻き込まれて、日本も西洋列強と同じような文明を手に入れて、ヨーロッパ型の国民国家体制をつくらうとした。その選択自体は間違っていないと思うんですが、その結果、天皇制中央集権国家になってしまった。すべて明治政府、中央、東京に従うという形になったわけです。

江戸時代までは、どちらかというと分権国家なんです。

徳川幕府は中央政府の役割を果たし日本全体を統一国家にするわけですが、指令は出すけれども、やり方は各藩別々ですよ、と。それぞれが独立国家として、政治も勝手にやってくください、産業も自分たちで選んで、年貢だけ納めればいいですよという仕組みになっていた。領民の教育も、地方文化も、ばらばらだったわけです。

全国二六〇諸藩と言われます。二六〇の独立国家があったんです。とくに島は、独自の文化を持ち、本土から簡単に支配できないから、佐渡国や隠岐国として扱われた。島根では石見と出雲、隠岐という三国が対等な役割、独自性、文化を持ち、歴史を築いてきた。明治になるとその三国が集まって島根県になり、今度

は島根県や中央政府から命令が来る。「第一の開国」は国家としては必然的だったんだけれど、徳川時代のよさというの、非常に分権的で、それぞれの土地や文化を大事にする、固有の産業を非常に重要視するというものだった。

——塩や紬、工芸もありました。考えてみますと、これぞ自立でした。

日本は戦前、 こうしたヨーロッパ型、 西洋列強型の 大陸国家のあり方を 学んだんです。

松本 それがすべて、中央の指令に従うようになる。日本全国、どこの公園も、ケヤキを何本、ツツジを何本植えろとか、これは中央集権国家の弊害ですよ。江戸時代の持っていた、地方文化の豊かさというもの、人々がその土地を守るためにいかに「一所懸命」自立していったか。徳川時代は封建制で忍従の生活だったというようなことを言う人が多いけれど、そんな単純なことではない。

哲学者の和辻哲郎（一八八九—一九六〇）は、『風土』（二九五五年）の中で、アジア、とくに日本の風土、米づくりの風土の中で生まれてくる精神形態は「忍従」であると書いているのです。忍耐強いことは間違いないけれども、独自の文化を持ち、村や浦共同体の自治で地方を運営していくという側面は見えていなかったわけです。

明治政府が徳川幕府を倒して、文明開化の国家をつくっていったんだと喧伝するのはいいですよ。しかし、アカデミズムもそれに全部従ってしまおう。西洋では個人の自立した民主思想が生まれたけれども、日本では、封建社会の中で忍従という精神が生まれたという捉え方です。

『風土』はすぐれた作品なだけけれど、非常にゆがんだアジア観、日本観になっている。それに対して、私は『泥の文明』（新潮選書、二〇〇六年）という本を書いて、ある意味

では、和辻哲郎批判をしているわけです。また、『海岸線の歴史』で近代化の意味を問うている。

——確かに和辻は、厳密には島嶼性を見てはいない。

松本 とにかく明治の近代国家体制というのは、極端に言うくと、海洋国家のような戦略をとるんだけど、ヨーロッパの国々は基本的に大陸国家の発想なんです。ヨーロッパは、ベルギーやオランダなどだいたい小さな国々です。大きな国としてはフランス、スペイン、イタリアがあります。

すけれど、近代国家が発展して文明開化すなわち鉄道を敷き、大理石で国会議事堂をつくり、そこに国民の代表を集めてきて議論をしたりするには、ものすごくお金がかかるわけです。

牧畜を主とした西洋の農村社会では、パンをつくって牛乳を飲み、ワインを楽しむくらいの生活はできるけれど、近代の文明国家をつくるためには、ヨーロッパからアフリカやアジアに出かけて行って、植民地を持つという形ですが、自国民を豊かにする、充実した富国強兵政策はとれないという考えになるわけです。

日本は戦前、こうしたヨーロッパ型、西洋列強型の大陸国家のテリトリウムを学んだんです。海国日本とも言ったじゃないかと言うけれども、海を越えて、軍事力で海外植民地を取りに出ていったという、そういう戦略が強いんですね。

——そうですね、英国に学んだ結果だと、どう考えてもそうなってしまう。

松本 つまり、軍事力によるテリトリウムゲームですね。大きな領土を持って、たくさん資源を手に入れるという戦





最初から日本統一の
文学や言語、ものの考え方、風土観が
あるかといったら、
そうじゃないんですね。

至上主義の何が失敗だったのかという
と、日本とはいかなる国で、どうい
う風土に住んでいる民族で、どんな文化
的な特性を持っているのかを考えな
かった。海洋国家のウエルスゲームだけ
ではだめなのです。

略で失敗をしたのが昭和の戦争だった。その結果、日本は、「第二の開国」をしたわけだけれど、ここでは経済力によるウエルスゲーム、まさにイギリス型の海洋国家、それも軍事力は、できるだけ軽減ししっかりとした産業を持ち、貿易を盛んにするという形で一九六〇年代、七〇年代の、世界第二の経済大国が生まれていったと思うんです。

そこまでは成功なんですよ。しかしその結果、経済至上主義に陥って、バブルの時代が生まれるわけですね。経済

いま、中国や韓国が元氣に見えて、日本だけが低迷しているように思われるけど、韓国や中国は、極端に言えば日露戦争のころの日本に近いんですよ。国民国家をつくって、富国強兵政策で、国家がすべてを決めて、どんどん海軍も強くしていくという形をとってきた。政府の指令、中央集権制が強い。一方では、企業自体はグローバル企業になっていくから、政府の法律的な、資金的な援助を受けながら、海外市場に触手を伸ばしていく。そういう形をとっているから元氣なんですね。

パトリオティズムを 育んできた郷土教育

——これからもっと、そのグローバル리즘路線は突き進んでいくと思いますね。大陸国家は、やはりたいへんなグローバル리즘が進んでいったのに、ナシヨナリズムを根底に置いておいたから、きちつと冷静に対応できたのではないか。ところが海洋島嶼国家の日本は、「第二の開国」以降、二〇年間ぐらいはまだよかったわけですが……。

松本 高度成長のときまでは、よかったです。

——いま、大学でも国家論は教えてくれると思うんです、しかし、国土観や風土論を根底にした国家観を、ほとんど教えなくなってます。たんじやないでしょうか。

松本 若い人が旅をしなくなりましたし、国家体制論は教えるけれども、ナシヨナルアイデンティティ、つまりこの国はいかなる国かということ、その歴史、固有の文化というものを教えない。最初から日本統一の文学や言語、ものの考え方、風土観があるかといったら、そうじゃないんですね。みんなパトリオティズムなんですよ。自分たちの生まれ育った風土を見て、「ああ、日本は美しい」と。美しいと思う意識は共通なんだけ

江戸時代は 非常に文化度が高く、 識字率も高かった。

れど、何を見て美しいと思うのか。海なのか渚なのか、白砂青松の風景、水田、火山や雑木林なのか。そういうところは違うわけですよ。しかし、中央教育のレベルでは、すべて同じように教えるわけです。君たちの住んでいる郷土はこんなに美しいでしょう、それをつくったのはあなた方のお父さん、お母さん、ご先祖ですよ、先人ですよ、ということば教えずに来てしまった。

その点は、まだ明治のころのほうがしつかりと教えているわけです。ふるさとの偉人はだれなのか、ここに水田をつくったのはだれなのか、水がないところに疎水を引いてきたのはだれなのか。この土地には水田は合わない、山村地帯だからコンニャクをつくり、桑を植えて養蚕をやれとか、あるいはリンゴをつくれと試みたのは、国策ではなく、ふるさとの先人なんです。ところが戦後の教育では、日本国憲法は非常にいいところもあるんですけど、世界共通のレベルしか教えていないわけですよ。教育基本法も同じなんです。

戦後は、郷土史読本がなくなりました。日本の国の歴史を教えるのはいいけれど、郷土の歴史なんて教えちゃいけないことになった。これが今度の教育基本法の改正で、「わが国と郷土を愛する」と、郷土読本をつくれるようになった。

ある意味では一歩前進ともいえるわけですね。ところが、いまや郷土のことを教えられる人も、どんどん少なくなってきている。

私が大学へ入った一九六四年から、隠岐島や八丈島、淡路島、対馬に行ったりするようになった。一九七〇年代ぐらいまでは、六、七〇歳で、郷土のことを何でも知っているといる人が、どこの島にも一人はいたんですね。佐渡島だったら山本修之助さん、壱岐島だったら山口麻太郎さん、八丈島だったら浅沼良次さんとかね。そういう家があったわけですよ。お父さんも息子さんも高校の先生をやりながら、ずっとふるさとの歴史を編集したり、ふるさとの文化のために俳句や和歌の機関誌をつくったりしていた。

一八七三年の壱岐島騒動（犬狩騒動）（註7）については、中央の歴史書にはまったく出てこないわけですよ。だから知っている人がいないかと思って調べてみたら、山口麻太郎さんが論文を書いているというので壱岐島に訪ねていました。柳田国男の協力者の山口さんはまだ六〇代だったと思います。ほんの数年前に亡くなられたんですね、ガリ版でつくった資料を拝見し、当時住民たちはここに集まっただんだというような話をしてくださった。何日でも泊まっていたいいいからと言われて——私はちゃんと宿をとったんですね、どの島にもいたんですね。

極端に言うくと、そういう人は江戸時代以来の文化を持っているわけです。昔は図書館なんかいでしょ、江戸時代までの人は、自分の書庫を持っていたわけです。これは見どころがある者だなど思ったら、自分の書庫に入れる。江戸時代は各地にそういう家があった。中央の大学のようなものとはほとんどないに等しい。

全国の優秀な学生を集めた昌平黉（昌平坂学問所。神田湯島に設立された幕府直轄の教学機関）はありましたけれど。場合によっては庶民の出身でもいいという方法をとって、庄内の清河八郎（一八三〇～一八六三。尊王攘夷の志士）なんかも入学している。でも、官学ばかりだから面白くない。しかし、たとえば九州の大分に行けば、広瀬淡窓（一七八二～一八五六）という、弟子が三〇〇〇人もいる儒学者がいて、そこに全国から勉強をしに来るといふ学び方があった。そうすると、そこに町がでちゃうわけですね。三〇〇〇人というのは総人数ですけど、毎年、三〇〇〇人ぐらい全国から学生が集まってくるわけです。そうすると、そば屋から何から、みんなできるわけです。そういう学校施設は藩がづくってくれたり、地元有志がスポンサーになってくれたりする。若い三〇〇〇人の学生が飲み食いして、紙を買い、衣服を整えたりもする。あらゆる商売ができるわけです。

こういう学者が各地にいたわけです。もう少し小規模だけれど、松下村塾もある。蘭学者の緒方洪庵（一八一〇～一

三)が大坂に適塾をつくったりする。これは、東京の、中央の指令でやっているのではなく、地方に有力な塾が生まれ、全国から人間が集まるわけです。江戸の町だけだったそういう塾はいっぱいあったし、下支えのところでは、江戸の町に二七〇もの寺子屋があったのです。

だから、江戸時代は非常に文化度が高く、識字率も高かった。男だったら七割、女性でも三割ぐらい。女性は、文字によって考えたりものを発表したりということは少ないんですけど、言葉で、口承文芸として伝えるんですね。そのような形で、江戸時代の文化というのはできていた。地元の教育や文化によって人間が育ち、その塾を出た子どもが大きくなると、また自分の子どもをそこにに入れるわけです。そういう施設が全国にいっぱいあった。

岡山藩の閑谷学校しずたに、これは侍のためではなく、儒教を中心に一般庶民が学ぶところだった。いまでもその伝統は続いているんですね。これが最終的に、郷土愛、パトリオティズムになっていくわけです。自分たちも大きくなって、お金ができたならそこに寄附する、有能な先生を呼んで自分で学校をつくってしまおうとか。

※註7 豊岐島騒動(大狩騒動)・・一八七三(明治六)年、地租改正法が施行されたことで土地の私的所有権が明確になり、豊岐では島産の米を売り払って地租を払うことになったが、小野組の米の不正相場による売買で利益を手にしていた県の役人や商人の悪行が露見、新政への不満や生活難も重なっ

て、二〇〇人におよぶ住民が「野犬狩り」を名目に参集、役人宅や商店の打ち壊しを行った。

島の特性の再評価と 文化の豊かさの再認識を

——もう一度お尋ねしたいんですが、海洋国家と松本さんはおっしゃった。長い時間を経なければ、そういうことに行き着かないということにはわかるんです。にもかかわらず、国連海洋法条約の批准前後から、ここ数十年ぐらいの日本の海洋問題に関わる対外的な低迷ぶりはいったいどこに由来しているのでしょうか。

松本 一言でいえば、国民の意識の原風景から海や島が消えたからです。近代の国民国家というのは、必ず「国土」「人民」「主権」を確定しなければいけない。国土を確定するということは、ここからここまでが国境線で区切られていて、その中の領域がわれわれの国土である、ということなんです。西洋近代の個人主義における私有の概念を国家に広げただけなんですよ。ここからここまでが、おれのものという。エンクロージャー(囲い込み)運動で困っていくという形になるんですね。

これが海洋にまで延長されて、海のごとまでがおれたちの所有、という領土の考え方になっている。室町時代から江戸時代までの六〇〇年間というものの、たとえば竹島は、

日本のものなのか、李氏朝鮮のものなのか、そんな争いはなかったのです。極端に言うと、海を共同利用していたという歴史がある。おれたちが先に来たのに、おまえたちが魚をとっちゃったみたいないざござはありましたよ。そんなことは、領土問題ではないのです。

近代国家の、海洋を囲い込む、国境線で区切るという発想、それに応じているのが、いまの新しい海洋法ですね。さらに、海底に鉱脈があれば、これからはメタンハイドレートや天然ガスなどの海底資源が、どこの大陸棚に属しているかが問題になる。中国からすると、中国の大陸棚が東シナ海に延びており、沖縄まで中国の領土なんだという主張になるわけです。

この近代国際法の考え方、私有の概念を海や大陸棚にも広げていく、この発想自体をわれわれは改めなくちゃいけない。海はみんなに自由だったし、これから何百年も何千年も一緒に使っていかなければならない、そういう場なんだという提案を、日本は国際的にしていかなければいけないと思いますね。だから近代法の捉え返しが必要となってくる。

同時に、海というものは渡っていく通路だ、という考え

私有の概念を 海や大陸棚に広げていく、 この発想自体をわれわれは 改めなくちゃいけない。

方もあるわけです。そうすると、島に住んでいる人々がそこで生活をして海を守ってきたという意味を、どのように考えるのか。

——松本さん、そこですよ(笑)。

松本 海洋自由なんだから漁業も自由だと、朝鮮半島などから隠岐島や能登半島の近海まで来て魚を獲っている。グローバル世界では、それは可能なわけです。公海ならどこで魚をとってもよろしいということになる。しかし、地元の人々が生活していくための海です。海の所有権ではないのですが、生活はちゃんと守ってあげなきゃいけませんよ、ということですね。それに、彼らが海を美しく、豊かに保っている。

島で暮らすとなれば、漁業や農業、林業などで十分に生活できないといけない。ところが、ソニーのパソコンを買えば何十万円、トヨタの自動車を買えば二〇〇万円もかかる。ところが島の産物を市場に出そうとしても、農地一坪あたりいちばん高い収益の米でも年に五〇〇円、一〇〇〇坪でも五〇万円にしかならない。それでは生活できないわけです。産業自体、グローバル世界だからグローバル企業がほとんど外に出ていけばいいと言ってきたけれど、そ

の企業は、現地住民の生活を、生存権を奪うようなことはしてはいけない。

グローバル化というのは、情報や金融、これはもう仕方がないことなんです。

コーヒー豆というのは、いま全世界で二社の独占なんです。スイス系のネスレと、ユダヤ系米国企業のヤコブ。モ

カコーヒーはアラビア、

キリマンジャロはキリマンジャロ山のふもとのタンザニアにあるわけですが、それを大きなグローバル企業が押さえると、「おまえのところは高い」と言い出す。

コーヒー豆のいちばんの生産地はブラジルで、これは五〇年前と変わらないんですよ。二番が、昔はコロンビアで、次はタンザニア、ケニア、要するにキリマンジャロコーヒーですね。でも、いまは二位がベトナムなんです。近くに市場がありますね。日本や中国、シンガポールでも売れるでしょう。運搬賃が安い。地味ははるかにいいから、キリマンジャロの山地とは違って、ものすごく穫れるわけですよ。そうすると、値段が三分の一になる。その結果、独占コーヒー豆企業から「キリマンジャロコーヒーも三分の一に下げなさい」となると、地場産業は全部つぶれてしまう。

現地住民の生活を、生存権を奪うようなことはしてはいけない。

これまではケニア政府やタンザニア政府が農業支援をしていたわけです。でも、グローバル化で自由貿易となると、つぶれるわけです。だからみんな、コーヒー豆の栽培はやめて、宗主国のフランスやイギリス、ドイツ、あるいはグアテマラだったりアメリカとか、そういうところに移民として入っていくしかなくなっているんです。その結果、欧米は移民問題で苦しむ。

これと同じような状況が、いま日本の島々で起こっている。島では生活できないから、東京などに出て行くようになって、どんどん過疎化が進んでいく、限界集落が増えているということですね。

明治のころ、日本の人口がいまの五分の一度、二六〇〇万人だったときに、一〇万人いた佐渡島がいま六万五〇〇〇人になっているという状況ですね。これは、将来にわたって、日本国家にとって島は要らないとか、島で生活する必要はないという発想になってくる。

日本はグローバル化をしなければいけない部分もあるんだけれど、同時に、限界集落化しつつある山村や島の住民をどう守り、セーフティーネットをどうつくっていくか。逆に言うと、それぞれの島の特性を、日本政府は再評価し、文化の豊かさを再確認しなければならぬ。そこから出てきた人々が、どういう文化を日本本土に伝えたのかという

ことも含めて、われわれはもう一回、考え直さなくちゃいけない。

総合産業、 総合文化の場として島を考える

——いまの一言は非常にうれしいですね。グローバル化のなかで、たとえばいま水面下で、日本の水源涵養林が外国資本に買収され、対馬では竹敷の自衛隊基地周辺を含めて、数千坪がすでに外国人に買収されてきている。

おうかがいしたいのは、この海洋島嶼国における島々の位置づけですね、役割と期待。前回、平成一五年の離島振興法の改正のときに、島の住民みんなの思いとして、島々の国家貢献を言わざるを得ない、と。本土より遅れているとか、競争条件が整っていないという話ではなく、島々の存在自体がわが国の領域保全に大きく寄与しているんだということ、第一条に「領域」という二文字を入れたんです。これは、領土・領海・領空をはるかに飛び越える空間概念です。国にとって離島の一つひとつが大事なんだ、と。

これから、この国が島々に何を期待するか、島と海に關して、この国は何を考えるべきなのか……。

松本 日本の島々は、本州だって大きな島ですから、海に囲まれ、われわれは海のそばに住んで、島人として生まれ育ってきたんだ、と。このことは、大きな誇りであり、われわれの文化やものの考え方、審美観や自然観の根底にあるんだ、と。文科省は、あの「松原遠く……」（「海」という歌をなくしちゃおうとする。「苦屋こそ」（「われは海の子」の「苦屋」というのも意味が分からない。「舟屋」もまだ地方に残っていますけれど、それもなくなってしまう。松原もなくなっちゃっているんだから、「松原」が入っている文部省唱歌や小学校唱歌はなくなそう、みたいなことになってくるわけです。

日本人がいかに海を眺め、島の中で育ってきたか。海やまの間の狭い平地に、「一所懸命」、田畑を耕して、あるいは森の木を守りながら生きてきたのかという、日本人の誇り（アイデンティティ）の根源について考えたら、そこには当然、島や海が入ってくる。海やまの間に住んできた日本人のアイデンティティは何なのかと、もう一度考え直す。「第三の開国」の現在、アイデンティティ・ゲームの時代なのです。アイデ

それぞれ島は、日本だけに
つながっているのではなくて、
世界につながっている。

ンティティを失くした民族は世界史に生き残れない。

いま、農業、とくに米は日本のGDPの三パーセントぐらいにしかならない。毎日三食、米を食べないときだってある。とくにいまの若い子たちは、朝はトーストで昼はスパゲッティ、夜はそばやラーメンを食べているかもしれない。

そうすると、日本の産業の根底に米づくりがあることがわからなくなってしまう。十数年まえ、農水省なんてなくせばいい、産業省でいいじゃないかという声も自民党の中から出てきたのです。それはおかしいことではない。

わすか数パーセントであっても、自分の国の国柄、日本人の生き方の根底に米づくりは非常に密接にかかわっているんだ、と。日清戦争後、講和の全権大使として李鴻章が来て島を見たときも、日本は「山耕して天に至る」と棚田をつくっている、こんな貧しい国はないと言った

ということだけれど、逆に、これは日本人の誇りでしょう。しかし、誇りの根源であると言って自尊心を与えただけではだめなんだ、農業に対してね。田んぼを耕しているだけじゃなく、川の補修をしなければ田んぼにうまく水が流れない。だから川の補修もするし、山の木の伐採、間伐もする。そのことによって、山の保水力が高まる。水田も保

日本人の誇りの

根源について考えたら、

そこには当然、 島や海が入ってくる。

水力の根源になっている、プールになっている。この人々が農閑期に山の伐採をしなくなったから、どんどん山が荒れてきているのですよ。だから国は、その人々に役割を与えて、労働に対する見返りとしてお金を払う。山の木の伐採をする、小川の補修をするという形で、日本の緑、美の根源を守るといって、グリーンシチズン (Green Citizen) という役割を与えて、それなりの手当をちゃんと払うという形

にしなれば、日本の農民はグローバル化の中で生き残っていきません。これは農家の戸別所得補償とは違うんですね。ちゃんと仕事を与えるわけですよ。

同じように、島を守っていくということは、海岸線を守る、海の美しさを守ることなのです。いま島では、ポリエチレンなどの漂着ごみに悩まされている。たとえば萩市では、日本で一番美しい海岸線を自分たちは持っていると言っている、それはお金のためじゃない。毎朝、町内の自治会員が代わりばんこで、菊ヶ浜のごみを拾ったり、草花を植えたりして美化を図っている。同じように、島の人々が、その島の海岸や海を守っているんだ、あるいは美を守っていると、大人がそのようにして働いていけば、子どもたちは「それが大人のことなんだな」と思うでしょう。口で言わなくても通じるんですね。

だから、島を守るというためには、いろんな役割があるわけです。これは島の人々のほうがよく知っているわけですよ。お金をもらわないでやっている活動が多いんですね。

だけど、グリーンシチズンと同じように、海岸線や美しい砂浜を守る住民という役割を与えて、ある種の労働報酬を与えると、この方法をとっていく。これは農家の戸別所得補償という以上に、国のために重要になってくるんじゃないか。消波ブロックと防波堤ばかりになってしまった日本の海岸線というのは、醜いですよ。世界各地の海岸線を見ていると、余計にわかるんですね。日本にはあんなに美しい海岸線が描かれていたにもかかわらず、近代産業化をすすめるためには仕方がないということで、国土を守るとい

■インタヴューを反芻して

ひとつのことを思い出しながら、久しぶりに松本さんにお話を伺っています。三〇年前、永く改正の加えられなかった離島振興法の時限と改正期を迎えるに当たり、松本さんにご無理を言って新たな離島振興の理念と法制化運動へのご提言をお願いしたところ、ひと月ほどのちに「真の離島振興とは離島振興法を無化することである」とする原稿を頂いてしまっと思わずヤリとしたことだ。

松本さんの思いとは別に、法律が出来たから島が良くなるんじゃないんだと言いつつ続けた宮本常一が、なにゆえ法制制というものに究極的期待を持たず、離島住民の草の根的運動の沸き上がりへの期待と指導に走ったかを考え続けていた者には、辿る論理の道筋は違えど遂に共通の地平に達するという意味で、おふたりには通底する強い思いがあると直感した。のちにご自身が語る

う形で土木産業だけがもうかる、消波ブロックだけをつくって売るといふ、そういう国土保全になってしまっている。島というものが一つの国であるとするならば、そこには農業も、漁業も、林業も、それから教育も、政治も、みんな含まれるわけです。総合産業、そうして総合文化の場として、島空間を考えるということですね。そして、それぞれの島は日本だけにつながっているのではなくて、世界につながっている、そして地球を形づくっているという捉え方をしていくべきだろうと思います。

——長時間にわたり、本当にありがとうございました。

平成二二年五月二七日（木）麗澤大学比較文明文化研究センター長室にて

ように松本さんの「無化」はシマにクニを再構築するための同時革命への幻視だが、宮本は離島住民自身の自己変革運動を手段として選んだ。松本さんが深く研究された革命家北一輝の事共もあり、幻想は共通するとして、松本ビジョンと宮本運動論のシンターゼを想起することは刺激的だ。

松本さんは、日本浪漫派・保田興重郎、政治思想家・丸山真男、日本浪漫主義批判の対馬生まれ橋川文三、雑誌「中国」の竹内好、マックス・ウェーバー研究者大塚久雄の流れを汲む現代日本の数少ない正真正の「思想家」である。間違っても読者は本編の静かな語り口に騙されてはならない。これは島と住民への激的な檄文のだから。

（聞き手／大矢内生気 全国離島振興協議会）

